

フィールドワーク便り

人民戦争を生きた治療師たち

中 村 友 香 *

2014年10月、私はネパール中西部のロールパ郡タバン村にいた。タバン村とその周辺地域で広く頼りにされているという有名な接骨師たちに会うため、この地へやって来たのだ。タバン村は首都カトマンズから西に270キロ程度の所に位置する山間の農村である。近年の道路建設の進行により村に向かう道は改善され、車が通ることができる道まで約1日半で、首都には車と徒歩合わせて約3日で行くことができるようになった。雨季の終わりの土砂崩れがネパールの他の山間地帯と同様に頻発した後で、山道に行く私たちの歩みをしばしば遅らせたが、いくつかの峠を越えた先で、石畳の美しい村が迎えてくれた。タバン村の中心集落には石を積んで作られた家々が並び、収穫されたトウモロコシが干され、放し飼いされた鶏や山羊たちが自由に行き来している。標高約2,000メートルに位置する村からは深い谷を流れるタバン川を臨むことができた。

タバン村周辺の治療師たち

現在タバン村と周辺地域には、古くから病氣や治療に関する知識人として村人に関わっ



写真1 タバン村

てきた民間の治療師たちがたくさんいる。

「村人のほとんどが治療師の親族だよ。そのくらいたくさん治療師がいるんだ。」

という村人の言葉のとおり、タバン村につくと村人たちは次から次へと自分の親戚が治療師だとか、知り合いの誰それが治療師の弟子になったらしいと語った。治療師たちの実践は多様で、当初私が会うことになっていた接骨師をはじめさまざまな治療を行なう治療師がいることがわかった。ここでは、まずその種類と特徴を紹介したい。

①接骨師

接骨師は骨折や脱臼を専門としている治療師である。彼らは他の接骨師から技術を学ぶ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 2 骨を触診する接骨師

とともに実践を通して技術の改善を行ない続けている。レントゲンを使わずとも、触診によって骨折や脱臼を判断し、マッサージや骨の位置の調節（押ししたり引っ張ったり）、竹で作ったギプスによる固定などによって治療を行なう。

山岳地帯で生活の場の多くが急な斜面であること、家畜のえさの採取のために木に登る機会が多いこと、また特に雨季には足場が悪く転倒や土砂崩れの被害が多いことなどから怪我は多く、現在に至るまで接骨師たちの仕事は絶えない。

②ジャイシ（伝統治療師）

ジャイシはこの地域の伝統治療師を指し、薬草やマントラ（呪文）を使って治療を行なう。村社会の中で尊敬される役割であり、人の役に立ち尊敬されるような仕事をしたいと考えた人々がこの仕事につくようだ。

ジャイシになるにはまず師を選び弟子に入る必要がある。師は経験を積んだ他のジャイシの中から自ら選ぶことができる。ジャイシになりたい旨を表明し、師に受け入れられればジャイシになる修行が始まる。修行はま

ず、マンガル語の読み書きをすることから始まる。マンガル語とはこの地域の古語であり、公用語であるネパール語や、タバン村周辺に住むマガル人の言語であるカム語とは異なる言語であると説明された。マンガル語を学ぶと、初めて弟子たちは師からマンガル語で書かれた治療とマントラの本を借りて、写すことができる。この本はポストコと呼ばれ、さまざまな病気の種類と治療法、そのとき唱えるべきマントラの内容などが書かれたものである。確認できた最も古いポストコは 1762 年に書かれたと記されたものであった。ポストコをたくさんもっていればいるほど多くを学んだ偉大なジャイシと判断される。

ポストコをもとに行なわれる治療はさまざまで、薬草や鉱物、動物の骨を使ったものやマッサージなどが行なわれる。彼らは風邪、関節痛、怪我、筋肉の硬直、黄疸（肝疾患）、てんかん、結核、蛇にかまれた、精神疾患、狂犬病、淋病、不妊の治療から、「悪霊と戦



写真 3 ポストコをみせてくれたジャイシのジェッド氏



写真4 マンガル語で書かれたポストコ



写真5 ジャンクリが祈祷に使用するベルや動物の皮

う」「好きな相手が自分に惚れるようにする」「怒らせた相手の怒りを鎮める」などの術まで幅広い実践を行なっている。

③産婆

産婆は年配の女性が多く、主に難産の介助をする役目や出産前後の問題に対処する役割をもつ。ネパール全体の60%、タバン村の80%が公的医療機関で出産を行なうといわれている現在、仕事は激減しているという。しかしながら話を聞いてみると医療機関に劣らない出産に関する技術が隠されていることがわかる。

「お尻から生まれる場合（逆児のこと）、手を入れて赤ちゃんの両足をつかんでくると回すと生まれてきますよ。」

とジェスチャー付きで述べるほかに、遷延性横位分娩（片腕から出産すること）の成功の経験もあった。遷延性横位分娩は西洋医学でも自然分娩が困難で救命の方法は緊急帝王切開しかないといわれている。ネパールの山

村では医療機関にアクセスしても手術可能な施設がなく母子ともに亡くなるケースが多い。彼らは少なくとも2件の遷延性横位分娩を経験し、そのうち1件は母子両方の、残り1件でも母親の命を救ったという。また、その他マッサージによって分娩前に逆児を治したり、薬草などを使って後産を促すなどの実践を行なっている。

④ダミ／ジャンクリ（祈祷師）

ダミ／ジャンクリはこの地域の祈祷師のことを指し、主に呪文や祈祷、薬草によって治療を行なう。ジャイシとは異なり師から技術を学ぶことは少なく、神の声や夢から病気に関する知識や治療の技術、薬草の生えている場所や効能について学ぶ。治療を行なう際には、太鼓やベルを鳴らして祖先や土地の神を呼んで自らに憑依させて声を聞いたり、お香をたいて悪霊を払う。彼らは感染症に対する薬草の処方から、悪霊払いまで幅広い治療を行なう。

人民戦争

培ってきた治療法や薬草の知識、長年の治療師としての経験やエピソードを私が尋ねると、治療師たちは楽しそうに語ってくれた。その一方でしばらく話しているとぼつぼつと思いがけず出てくる話題もあった。人民戦争時代の話だ。

人民戦争とは、ネパールで 1996 年から 10 年にわたりマオイストが中心となっていた行われた反政府武装闘争のことである。マオイストとはネパール共産党毛沢東主義派の人々のことを指すが、彼らはロルパ郡とその北部のルクム郡を武装闘争基地とし、勢力を全国規模にまで拡大していった。1996 年当初はマオイストのゲリラ部隊と警察・武装警察部隊の攻防にとどまっていた。しかしながら 2001 年にネパール国軍が投入され、政府側の残虐な制圧行為がかえって人々の反体制感情を煽ったことも重なり、無関係な村人を含む 1 万 3,000 人を超える死者を出す深刻な内戦になっていった。2006 年の平和合意の後、マオイストは武装闘争を離れ議会政党になり、2008 年の制憲議会選挙で第一党、2013 年の制憲議会選挙においてはネパール会議派、ネパール共産党統一マルクス・レーニン派に次ぐ第三党となった。

このマオイストの一連の動きを支えたのがタバン村である。タバン村はかつてマオイストの首都と呼ばれ武装闘争のベースキャンプとして党大会や党中央委員総会などの重要な会合を経験し、ほぼすべての村人たちはマオイスト、またはその支持者となったとさえいわれる。マオイストとなって襲撃へ向かった



写真 6 タバン村に書かれた毛沢東らの壁画

者たちだけでなく、村にとどまった女性や子どもを含む支持者たちも軍の襲撃の犠牲となり、人々は森の中での避難生活を余儀なくされた。

治療師たちと人民戦争

このような状況の中、タバン村とその周辺地域の治療師たちもさまざまな立場で人民戦争を経験していた。

「私は人民戦争で 11 人の弟子を亡くしました。」

とタバン村周辺で偉大なジャイシとして有名なジェッド氏は言う。彼は、彼自身が治療師を続けながらマオイストのミーティングに参加していたこと、14 人いた弟子のすべてが村人たちの経済や教育や健康の平等と差別撤廃を目指してマオイストになったこと、そのうちの 11 人が人民戦争によって亡くなり、残りの 3 人は今でもマオイストとして活動し続けていることを語った。他の治療師たちもマオイストの主要メンバーとして人民戦争に参加したこと、治療師の傍らマオイストとしての活動をしたこと、マオイスト専属

の治療師として人民戦争に動員されたこと、村にいてマオイストとネパール国軍の双方の治療を行なったことなどさまざまな体験を語った。

またマオイストであるナムジェ氏は、

「私たちは治療師の活動を否定しませんでした。伝統的な薬草の知識は素晴らしいものであり、その知識を進んで取り入れようと思いました。マントラや祈祷などは精神には訴えかけますが、科学的でないという理由でそれを行なう治療師たちに教育を施すことはしていませんでした。しかしながら私たちは彼らの仕事自体を否定することはしませんでした。」

と語る。社会主義下に置かれた国々では、宗教活動に対して否定的な態度が示され、モンゴルやロシアなどをはじめとする国々ではそれに伴って伝統医療に対する圧力が加えら

れた。一方マオイストの勢力下に置かれたタバン村ではヒンドゥー教に対してこそ否定的な態度がみられたものの、独自のマントラや神と結びついた治療師たちの実践は必ずしも否定されなかった。マオイストと治療師たちは対立関係に置かれていたわけではなかったようだ。

2006年の平和合意後、タバン村では公的医療機関での出産奨励政策や交通機関の発達によって都市の医療機関を頼る人口が増加し、伝統治療師をとりまく状況は変化し続けている。しかしながら彼らは単に古くからの知識を継承する消えゆく存在とはいえない。人民戦争というネパールの激動の時代を生き、た彼らはまた、新たな時代とともに立場を変えながらも生き続けるのではないだろうか。

「客人たちの父」預言者イブラーヒームのおもてなし

—パレスチナ自治区・ヘブロン／ハリールの食事配給施設を訪ねて—

山 本 健 介 *

2つの名をもつ町

パレスチナ自治区の町・ヘブロン (Hebron) ／ハリール (al-Khalil)。2つの名で知られるこの町は、ヨルダン川西岸地区の南方に位置

し、セム的一神教の祖、預言者イブラーヒーム (アブラハム) と深い関わりをもつ。ヘブロン、ハリールという名は、それぞれヘブライ語、アラビア語で「友」を意味し、イブ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ラーヒームが「神の友」とされた伝承がもとになっている。クルアーンにも、「アッラーは、イブラーヒームを親しい友〔ハリール〕にされたのである」（婦人章125節）とある。この町が、預言者イブラーヒームに因んで呼ばれるのは、彼とその家族（妻サラ、息子イサクとその妻レベッカ、孫のヤコブとその妻レア）が眠る墓廟の存在による。現在はその廟の上にイブラーヒーム・モスクが建てられている。

イブラーヒームは、現在のイラクに生まれ、¹⁾ 放浪の末、ヘブロン／ハリールに住み、先立った妻を洞穴に葬った。ヘブロン／ハリールは、預言者イブラーヒームに因んだ町として、イスラームでは、ときにマッカ、マディーナ、エルサレムに次ぐ第四の聖地といわれ、ユダヤ教においても、エルサレム、サファド、ティベリアと並ぶ四大聖地のひとつとされる。このような宗教的重要性も一因となり、イブラーヒーム・モスクは、さまざまな勢力による争奪戦を経験してきた。イブラーヒーム・モスクは、キリスト教の教会（ビザンツ帝国）、モスク（イスラーム征服）、教会（十字軍）、モスク（イスラーム王朝）という変遷を経て、現在はその内部にユダヤ教の礼拝施設が存在するに至っている。パレスチナ問題との関わりでいえば、1994年に生じた、ユダヤ人による礼拝中のムスリムへの銃撃事件が最も大きな出来事であった。モスク内にユダヤ教の礼拝所があるという奇妙

な状況は、この虐殺事件を契機にイスラエル政府がとった措置である。

イブラーヒーム・モスクが辿った数奇な来歴はまだまだ語り尽くせないが、今回は、このモスクの北西の入り口から向かって左側に注目したい。そこにはアラビア語で「タキーヤ・イブラーヒミーヤ」（al-Takīya al-Ibrāhīmīya、以降タキーヤ）と書かれた看板が見える。あえて日本語に訳すとすれば、「イブラーヒームの旅人休憩所」といった感じになるだろうか。

「イブラーヒームのおもてなし」とその整備

このタキーヤは、ワクフ（寄進地）によって、ハリールの住民やそこを訪れた人々に無料で食事を提供している。このような食事配給制度のはっきりとした起源は明らかではない。しかし、その背景には、やはり預言者イブラーヒームの存在がある。

イスラームにおいてイブラーヒームは、しばしば、その「寛容性」が強調され、²⁾ 「客人たちの父（Abū Dīfān）」というクンヤ（渾名）ももっている [Shurrāb 2006: 83]。この町では、少なくとも10世紀頃から、客人や訪問者に無料で食事（スマート・ハリリーと呼ばれる）を振る舞う風習があったといわれる。だが、これらの食事の提供が組織的に行なわれるようになるのは、サラフッディーンによるパレスチナ解放を経たマムルーク朝期であり、タキーヤという名称その

1) 旧約聖書の「ウル」が、現在のイラクのウル遺跡であるか、トルコのウルファであるかについては議論がある [竹下 2010: 72-73]。

2) クルアーンの（撒き散らすもの章：24-27）では、見知らぬ来客に食事を振る舞うエピソードが記述されている。



写真1 イブラーヒーム・モスクの全景



写真2 預言者イブラーヒームの墓標

ものはオスマン朝期に現れた。このようなシステム自体は比較的新しいものであるとしても、それは、イブラーヒームの客人へのもてなしの精神に起源をもち、預言者が眠る町の民が継承し続けてきた結果として存在する。

パレスチナの都市の多くは、サラーフッディーンのアユブ朝を経た後のマムルーク朝、オスマン朝にかけて黄金期を迎えた。エルサレムへの巡礼が盛んになるとともに、ヘブロン／ハリールにも、預言者たちの墓を目指し、イスラーム神秘主義者をはじめとする多くの旅人が訪れ、現在の旧市街（イブラーヒーム・モスクの周囲）は栄華を極めた。このような訪問者の増加と、町の発展の中で貧困が問題化し始めたことを背景とし

て、スマート・ハリリーの組織的な提供が開始され、タキーヤの整備が進んだ。そしてオスマン朝期には「ハリールは、その民が飢えを知らぬ町として知られていた」[Zalūm 2001: 70]。

タキーヤ・イブラーヒミーヤの運営風景

筆者は、タキーヤやスマート・ハリリーについて、渡航以前から文献資料を通じてその存在を知っていた。とはいえ、これらが現代にまで継承され続けているとは思ってもみなかった。もともとの現地調査の想定には入っていなかったが、モスクの左手にその存在を確認して以降、興味が惹かれ、訪れてみることにした。

実際にタキーヤの入り口にたどり着くと、タキーヤの職員は、筆者とごく簡単な挨拶を交わし、半ば強引に中へといざなった。筆者が訪れたのは11時40分頃。かつては、訪問者に朝、昼、晩の三食振る舞われていた食事も、資金難から現在は昼食のみである。すでにその日の配給は終わり、職員が丁寧に大鍋の掃除を行っていた。筆者は、その日の配給のスープの残りやコーヒーを御馳走になりながら、しばし談笑する機会を得た。その日のタキーヤでの滞在はさほど長いものではなかったが、帰る頃には旧知の仲のような雰囲気漂っていた。

次に筆者がタキーヤを訪れたのは、月曜日であった。金曜日と月曜日には、肉類（鶏肉、羊肉）が振る舞われる。筆者は11時前にタキーヤに到着したが、そこはすでに多くの人で賑わっていた。筆者の見立てで

は、だいたい 100 から 200 人程度が集まっていたように思う。ちなみに、タキーヤの管理に当たっている、ワクフ省傘下の組織、ハリール・ワクフ管理局 (Mudīriya Awqāf al-Khalīl) によれば、ムスリムが日中の断食を行なうラマダーン月には毎日肉類が振る舞われ、利用者は数千人にのぼるという。

配給が始まると、並んでいた人々は、我先にと容器を差し出す。そして、ドアを隔てた内側にいる職員たちは、鶏肉とスープを素早く容器に入れ、それを別の扉から渡す。慣れた手つきで、容器に鶏肉が入れられていくが、その数はどのように決めているのか。筆者が尋ねたところ、家族の大きさをなんとなく把握し、適当な量を決めているという。なかには、「もっと肉を入れてくれ!」と、容器を突き返す人もいる。その要望に対しても、職員は応じたり、応じなかったりと一様ではない。日本的な尺度からいえば、決して十分にオーガナイズされた仕組みではないように思えるが、それでもなんとか上手くまわっている。

だいたい鶏肉の数は 600-700 羽であるといわれたが、30 分ほどですべての配給を終えた。その様子をボーッと見ていた筆者に、職員のひとりが鶏肉を差し出してきた。「食べなさい」と言うので、筆者も遠慮がちに頂いたが、肉は柔らかく、非常に美味しい。申し訳なさそうにする筆者に対して、職員は「宗教にかかわらず、このタキーヤは誰でも利用できる」と語ってくれた。「訪問者への施し」という中世以来の伝統からすれば、東アジアからの訪問者である筆者も、その範疇



写真 3 食事配給の様子 (1)



写真 4 食事配給の様子 (2)



写真 5 盛況するタキーヤ

に入るようであった。タキーヤでの食事について、街の住民の中には次のように語る人もいた。「タキーヤで出されるスープなどは当然家庭でも食べる機会がある。でも、なんだかタキーヤのものはそれよりも美味しいような気がする。」雑談の中で冗談めかして言われ

ていたが、食事の質の高さもタキーヤが町の人々に愛され続ける理由のひとつなのだろう。

紛争中のタキーヤ・イブラーヒーミーヤ

筆者の聞き取りによれば、24年間タキーヤに勤務している古株のハティーブ所長を筆頭に、ほとんどの職員が10年以上勤続している。10年前のパレスチナといえば、2000年に生じた大規模な民衆蜂起であるアクサー・インティファダの影響が色濃く残っていた時期である。この蜂起に対するイスラエルの対応は、経済状況の悪化をもたらし、パレスチナ自治区全体、なかでもハリール状況を大きく変えた。民衆蜂起の時期から勤続している職員の多くは、ハリールが苦境に立たされてきた10数年をこのタキーヤからみてきた。

イスラエルの政策による経済的な衰退は、タキーヤにももちろん大きな打撃を与えた。第一に、度重なる外出禁止令と封鎖政策によって、ハリールのパレスチナ人は自由な移動が許されなかった。ハティーブ所長によれば、タキーヤはインティファダのさなかでも毎日活動を行ない、イスラエル政府による閉鎖命令などは受けなかったという。しかし、その受益者となるパレスチナ人の移動が不自由なため、インティファダ期におけるタキーヤの利用は、その近隣に住む住民に限られていた。そして、第二に、2000年以降のハリールにおいては、貧困層の割合が大きく増加した。蜂起を鎮圧するイスラエルの政策は次第に緩和されたものの、一度職を失っ

たパレスチナ人が新たな仕事を見つけることは容易ではなく、ハティーブ所長の見立てでは、タキーヤを利用する人口は40%近く増加した。このような貧困の蔓延によって、タキーヤの果たす社会的役割は増大したのである。

むすびに

現在の筆者の主要な関心は、紛争の中で荒廃したハリール旧市街の復興事業である。先行する研究では、このタキーヤの存在はほとんど語られてこなかった。食事の無料配布という形で、貧困層の人々の生活に直結する問題を扱うタキーヤが、旧市街の復興の中で、極めて重要な役割を担っていることは疑う余地もない。長引く紛争の中で、現在のタキーヤの役割は、中世以来のそれとは大きく異なっているだろう。しかし、その機能を変えながらも、必要とする人々のために食事を施すというイブラーヒームのもてなしの精神は、預言者の町に今も変わらず生き続けている。

「おもてなしの国」日本から来た筆者は、預言者伝来のおもてなしを体感し、中世の趣を残す美しい旧市街をあとにした。

引用文献

- 竹下政孝. 2010. 「神の友、アブラハムの物語」『中東協力センターニュース』34(5): 71-78.
 Shurrāb, Muḥammad Muḥammad Ḥasan. 2006. *Al-Khalīl: Madīna ‘Arabīya Filasṭīniya*. ‘Ammān: Maktaba al-Ahliya.
 Zalūm, Ḥumūda. 2001. *Al-Khalīl: al-Tārīkh, al-Ḥaqāra, al-Turāth*. ‘Ammān: al-Mu‘allif.

「目覚めた人」が、日々瞑想し続ける理由

松 岡 佐 知*

「花をみて、花が美しいと思うということは、自分自身を認識していないということだ。目の前にみている現実と思っているものは、自分が想像して作り上げた像だから、自分の一部であり内部がそこに写し取られる。物事に善悪はない。怒りがこみ上げるのは、目の前の状況が原因ではなく、自分がその状況に対し怒りという感情を作り上げているのだ。苦しみも愛することも同じである。自分の内部が自分を取り巻く世界を作っている。目覚めた人 (conscious person) というのは、これが常に無意識にできているのだ。つまり、自分で世界を作っているのだ。」

インドに着いた翌朝に、コーチという人口 60 万人、ケーララ州内で最も人口密度が高い町の道ばたで、ばったり再会した友人サジーから、朝食をごちそうになりながら聞いた話である。偶然の再会もインドにいと不思議だと感じないから不思議だ。

その前の年に、私は調査のためにヴァイッディヤ¹⁾ (無資格伝統医師) が運営する治療院に滞在していた。その治療院を訪れていたサジーは、その治療院のある村から 30 km ほど離れたコーチ市の住宅地内でヨーガ教室を営んでいる。到着直後の偶然の再会と繰り広げられる精神世界の話に、「ああ、私はイ

ンドにいる」と思わずにはいられない。

私を知るインドは、目の前に繰り広げられる生々しい現実世界と、静寂の中にあるような精神世界がうまく同居している。そして、その両者をつないでいるのが、「目覚めた人」と個性豊かなヒンドゥーの神様たちの存在であろう。

治療院での習慣

目の前が海岸である治療院の朝は、夜明け前 5 時から始まる。潮風を受けて、肌寒い。ブランケットを身体にまとう。ヴィシュヌ神が祀ってある祭壇からは、もうインセンス (線香) の香りがしている。アンマ (ヴァイッディヤの母) から甘いチャイをもらい、浜辺に面したテラスにヴァイッディヤやスタッフとともに集う。まずは、敷物の上に蓮華座になる。目を閉じて、ただ座る。感じるのは、潮風と自分の呼吸の音だけ。いつの間にか、波音は遠く離れていき、自分の内側に視点が移っていく。これを瞑想というのだろうか。しばらくすると、クリシュナ神を愛でる歌が柔らかな民俗楽器の音とともに鳴り響きだす。CD プレーヤーのスイッチを入れたようだ。隣の家の鶏も起きだしたようである。太陽がでてきたことが、目を閉じてい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 元はサンスクリット語で医師の意味。

てもわかる。それからゆっくり目を開いて、
 ヨーガで身体をならす。プラナヤーマー²⁾
 (呼吸法) からだんだんダイナミックな動き
 になり、ハタヨーガの決まったアーサナ (型)
 をいくつかをして、最後は横になってシャバ
 アーサナ (死体のポーズ) で呼吸と心を整え
 る。身体が「目覚めた」気持ちになる。その
 ころには、朝 8 時。太陽はしっかりあがっ
 ている。いよいよ、仕事の開始だ。今日は、
 どんな患者さんが来るだろうか。本調査を前
 に、私は治療院にある薬局や製剤所での作業
 の手伝いをしていた。予約はとらず開業時間
 を決めていない治療院はヨーガが終わるこ
 ろには、ヴァイッディヤを待っている患者がい
 ることがしばしばあった。どこの世界におい
 ても、痛みを抱えた者が救いを求めることに
 変わりはない。

独自の薬づくり

ある日の製剤作業は、歯痛止めの丸薬づく
 りだった。この歯痛止めは、クローブ、ナツ
 メグ、シナモン、ニーム、長胡椒、岩塩など
 13 種類の天然成分から成るヴァイッディヤ
 の独自レシピである。最初に 4 種の植物を
 煎じ、その煎じ液に 8 種類の乾燥させた薬
 用植物を一晩漬け、それを擦りながらバター
 状になるまで練る。そこに岩塩とカンファー
 を加えたものを一粒 3g 程度 (ヴァイッディ
 ヤ説明) に丸め日干しにする。この丸める作



写真 1 治療院の前で瞑想する人
 (2013 年 9 月撮影)

業に元患者のレンジットゥと一緒に取り組ん
 だ。彼は、隣の郡の海岸部出身でこの治療院
 に入院をしていた。1ヵ月の治療が終わった
 後、伝統医のすすめに従い住み込みで手伝い
 をすることになった。病気のために手先が円
 滑に動かない彼と人一倍不器用な私が作る丸
 薬はなんとも無骨で一般に想像する丸薬とは
 ほど遠い。大きさは目分量だ。

目覚めた人、ヴァイッディヤ

私が調査対象としたヴァイッディヤは公
 的な医師資格を有していないが、アーユル
 ヴェーダ、シッダ医学、ヨーガ、カラリパ
 ヤットゥ³⁾ (ケーララ州の伝統武術)、先住
 民の医療などをそれぞれのグル (導師) につ

- 2) サンスクリット語で氣息・呼吸を意味するプラナと制御・延長を意味するアーヤーマーの合成語。呼吸をコントロールすることで、生命エネルギーの調節ができるとされる。
- 3) 身体に油を塗り、19 種類の蹴り技や素手での打撃技、当身技、投げ技などがある。この武術で用いられるマルマ (身体に 107 ある急所のことで中医学の経穴に類似) はアーユルヴェーダ治療に取り入れられている。
- 4) 末尾の「ジ」は、日本語の「さん」にあたるような一般に用いられる敬称。



写真2 泥だんごのような丸薬
(2012年9月撮影)

いて学び、独自の医療を提供している。そのヴァイッディヤは常にオレンジ色の布をまとい、長く縮れ束になった髪をまとめ、サドゥー（ヒンドゥー教の修行者）のような風貌である。「目覚めた人」と地域住民に認知されており、グルのひとりからヒンドゥー教の聖者の敬称であるスワミーを授けられ、周囲の人からは「スワミージ⁴⁾」と呼ばれている。

そのヴァイッディヤを含め、私が会ったことのある「目覚めた」人は、みな深く澄んだ瞳をもち、無邪気に笑う。どことなく、そのすべての人は似ている。「目覚めた」状態というのは、ある種特殊な状態であることが感じられる。

「目覚めた」状態が、サジーのいうように常に無意識下で内観状態が保たれていることだとすれば、「目覚めた」人が瞑想をする必要はあるのだろうか。ヴァイッディヤの教えでも、多くの書物でも、瞑想は内観法のひとつだといわれる。ヴァイッディヤは、「目覚



写真3 診察中のヴァイッディヤ
(2013年1月撮影)

めた」にもかかわらず、毎朝の瞑想とヨーガを欠かさない。聖者というものは瞑想するもののだといえそうであるが、瞑想というのは、「目覚めた」人にもなぜ必要なのだろうか。

むしろ、「目覚めている」人

あるとき、ふとヴァイッディヤに尋ねた。「スワミージはなぜ毎日瞑想をするのですか。」すると彼は、自信に満ちた様子で、はっきりと、ゆっくりとした口調で「忘れてしまうからだ」と答えた。「わ、忘れてしまう!？」自分の耳を疑うほどに、この返事は衝撃的であった。目覚めたという身体感覚を忘れてしまうということだろうか。「目覚めた」という表現は完了形で、ある閾値を超えた不可逆な状態かと思い込んでいたが、そうではなくて可逆な状態ということだろうか。つまり「目覚めた」ではなく、「目覚めている」と表現した方が正確なのかもしれない。同様に、仏陀は悟りを「開いた」といわれて

いるが、実際は「開いていた」のだろうか。

諸行無常，移り変わらないことなど何ひとつない。目覚めた人として、目覚められ続けるとは限らない。仏陀が悟りを開き続けることができたのは、諸行無常というこの世の性質を知っていたからなのだろう。そう考えると、仏陀が弟子たちにこの諸行無常という言葉を残した理由もより理解できる。

「目覚めている」という習慣

本当のところ、「目覚める」というのがどういうことか、私は理解できていない。それは実際に体感した人にしかわからないものなのかもしれない。私が出会った目が澄んだ人たちが本当に「目覚めた」人なのかどうかは、わからない。ただ、「目覚めている」状態が可逆なもので、日々瞑想をしていないと忘れてしまうのなら、「目覚めている」というのは習慣のようなものではないか。運動習慣とは次元が違うが、その「目覚めている」状態を無意識で行なえるほどに習慣化できている人であると自分の中で解釈した。

「目覚める」効能と失念

仏教では四苦八苦というが、人間の生は苦しみに満ちている。滞在している間にも村で公共バスの大きな事故や自殺があった。病気になれば、痛い、辛い。「目覚める」という考え方は、そんな苦しみに対症するひとつの術なのだろう。「目覚めている」ヴァイディヤに病める人が集うのは、そこにも理由があるのかもしれない。

冒頭のサジーの言葉を思い返すと、ここに私が分析的に記述したインドの「習慣」もまた、私の内面が作りだした偶像にすぎないのではないかという感慨に襲われる。客観性が求められる研究の場で出会った主観の世界とその主観を客観的にみるという視点は、まわりまわって、主観を交えずに、その本質をみるという観照を教えてくれた。だから、どう世界をみるか、見続けるか、見続けられるか、それは自分自身にかかっていると、そう思っただけでインドでの調査から毎度帰国する。しかしながら、あっという間に世俗に埋没しそんな習慣のことなど「忘れて」しまう自分がいる。

ブルネイの人々がめざす新しい経済

—イスラーム金融に寄せられる期待を描く—

上 原 健太郎 *

東洋のベニス、東南アジア随一の産油国、専制君主による統治…。このように表現されることの多いブルネイ・ダルサラーム（以下、ブルネイ）は、ボルネオ島の北西部に位置し、日本の三重県程度の面積をもつ東南アジアの小国である。国名の一部であるダルサラームは、アラビア語で「平和の館」を意味する。

ブルネイは 1888 年に英国の保護領となり、その後 1984 年に完全独立を果たした。国教はイスラームであり、人口の約 80% はイスラーム教徒（ムスリム）が占めている（2011 年の公式統計による。以下同様）。

その経済構造は石油と天然ガスによる鉱業が中心であり、日本との経済交流も活発である。2011 年におけるブルネイの輸出総額の約 43% は対日輸出であり、特に輸出された天然ガスの約 90% は日本向けである。しかし、近年のブルネイ経済は、鉱業のみではなく、その国教であるイスラームの理念にもとづくイスラーム経済の活況でも知られるようになってきた。その具体例が、イスラーム金融である。イスラーム金融は、国内の金融部門において影響力をもち、さらにムスリムの生活と深く関わっている。

ブルネイのイスラーム金融は、1990 年代からその取り組みが始まり、現在では 2 つの金融機関が業務を行なっている。国内市場におけるこれらの金融機関のシェアは、4 割に迫る勢いである。

国内初のイスラーム金融機関であるブルネイ・イスラーム信用貯蓄公社（以下、貯蓄公社）は、設立された 1991 年から現在に至るまでムスリムの貯蓄や資産運用を中心にサービスを提供してきたことで知られる。人材開発部門の女性役員は、貯蓄公社が銀行という形態をとらずに独自の発展を遂げたとして、その社会的意義を自信たっぷりに私に語ってくれた。特に彼女は、貯蓄公社の設立目的、また主要な受信業務のひとつとして、ムスリム向けの巡礼用貯蓄預金の提供を挙げた。聖地マッカへの巡礼はイスラームの宗教的義務のひとつであり、ブルネイ社会においても重要視されている。貯蓄公社は、国内で高まる巡礼熱に呼応するように成長してきたのである。

もうひとつのイスラーム金融機関で、国内最大規模の資産額を有するブルネイ・ダルサラーム・イスラーム銀行も人々の経済生活に大きな役割を担っている。写真 2 は、首

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 首都バンダル・スリ・ブガワンにあるブルネイ・イスラーム信用貯蓄公社

都バンダル・スリ・ブガワン随一の商業地区であるガドンの総合ショッピングモール、ザ・モールのATMである。外資系のスタンダード・チャータード銀行、先述の貯蓄公社のATMが立ち並ぶ中、同行のATMの前に大勢の人々が行列を作り並んでいた。その他にも、バンダル・スリ・ブガワンの飲食店などでは、同行のカードや携帯電話による決済サービスを使用できる旨を示したポスターが目に入ってきた。実際、私が現地で用いたプリペイド式携帯電話の支払いを行なう際、ブルネイ・ダルサラーム大学の院生である友人が、スマートフォンによるネットバンキングのサービスを用いて支払いを立て替えてくれた。

金融商品の中で、特に私の目を引いたのがラフンであった。端的に言えば、ラフンとはイスラームの教えに沿った質のことである。通常の質では、借り手が融資を受ける際、質屋が査定した品物の金額に対して、利率が決定される。しかし、イスラームでは利子を取



写真2 商業が盛んなガドン地区にあるザ・モールのATM

ることが禁じられているため、事情は異なる。ラフンの場合、借り手の所有物の価値自体に対して、それを維持・保管するための管理料を取るになっている。このラフンは近年ではマレーシア、ブルネイなどの東南アジア諸国において活発に取引が行なわれているという。

ブルネイのラフンは、1996年から導入が始まり、現在ではバンダル・スリ・ブガワンと商業都市セリアにて提供されている（写真3はバンダル・スリ・ブガワンのラフン）。借り手が質に入れるのは、ネックレス、ブレスレット、イヤリング、アンクレットといった、金やダイヤモンドの装飾品である（写真4）。そのため、ラフンの顧客は主に女性が多いが、男性も妻や母親などの親類から上の装飾品を借りて、ラフンを利用する事例もみられるという。

ラフンは、ブルネイの人々の経済生活に深く関わってきた。ブルネイでは毎年、国王の誕生祭が行なわれ、そこでは現地の人々によって多くの屋台が出店される。加えて、ム



写真3 首都バンダル・スリ・ブガワンにあるラフン

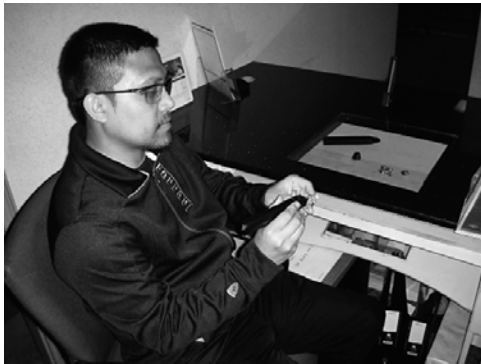


写真4 質物であるダイヤモンドの質量を計るラフンの従業員

スリムの信仰行為である断食が行なわれる際にも、飲食物を提供する屋台が期間限定で出店されるという。それらの開業資金にラフンで借りたお金が当てられるのである。

社会生活においてもラフンは活用されている。そのひとつが、ブルネイ社会にとって重要な行事である結婚式である。ラフンは、結婚式費を賄うために利用されるが、それだけに限らない。ブルネイの慣習では結婚式の際に新郎新婦へ金が贈られることがあり、彼らが後にラフンを利用する事例に繋がるという。また、住宅のリフォームにもラフンは用

いられる。配偶者、子ども、孫など、家族がともに暮らすことを志向するブルネイのムスリムにとって、一世帯当たりの人数が増える傾向にあるため、それに応じて住宅を増築するのは一般的であるという。このようにラフンは、ブルネイの人々の生活に幅広く活用されているのである。

ラフンを提供するイスラーム銀行はこの手法の普及にとっても熱心である。その銀行でラフン部門を担当する女性責任者によると、ブルネイのムスリムの多くは元来、従来の質による借金に抵抗感をもっていたという。彼女は、イスラーム型の質であるラフンの利点を知ってもらうことで、この抵抗感を払拭してラフンのサービスを拡大させたいと意気込んだ。また彼女は丁寧かつ力強い口調で、ブルネイがイスラーム経済に期待を寄せる中、ラフンが経済生活においてさらに重要な役割を担っていくという将来展望を熱く私に語ってくれた。気付けば朝から始めたインタビューは正午過ぎになるまで続いていた。

イスラーム銀行でのインタビューを終えた後、私が宿泊していた大学の寮から金融機関のオフィスまで送迎してくれた友人が、帰路の車中にてふと思いついたように言った。

「今までのブルネイでは、額の大きいお金が必要になったら銀行から借りて、そうでなければ家族から借りるのが一般的だった。でも少額のお金を借りるうえで、ラフンという選択肢ができてきた。ラフンは、あくまで少しずつではあるけどブルネイの人々に認知され始めてきている。これは、この国で新しい動きなんじゃないかな。」

「新しい動き」という言葉に、私は引かなかった。ブルネイの経済発展については、その経済構造から石油・天然ガス中心の資源依存という面のみが強調されており、その他の動向は軽視されがちである。確かに、国内総生産の大部分を占める鉱業を抜きにブルネイ経済を語ることはできないだろう。しかし、一方でブルネイは、その国教であるイスラームにもとづいた経済発展にかなり本腰を入れ始めている。その代表が、イスラーム金融、そしてラフンなのである。非石油・天然ガス分野の発展という国家レベルの開発戦略において、イスラーム金融の発展は、資源の枯渇

に備えたブルネイ経済の新しい試みといえるのではないかな。

冒頭で述べたように、経済分野におけるブルネイと日本との関係は強い。しかしながら、日本におけるブルネイの認知度は、他の東南アジア諸国に比べて極めて低いように感じられる。ブルネイ経済においては、石油・天然ガスへの依存というイメージが強く、その分析は一面的な理解に止まっているといえる。しかし、イスラーム経済という観点からブルネイ経済の特徴を考えれば、これまでと違ったイメージを描くことができるのではないだろうか。